

大聖院: 大師堂

大聖院境内の最奥部にあるお堂では空海 (774-835 年) を祀っています。空海は真言宗を開き、大聖院自体も開創した仏僧として有名です。伝承によると、空海は 806 年に弥山を訪れ、真言宗の修行で今なお中心的な役割を果たしている「護摩焚き」などの修行を実施しました。この出来事が大聖院の起源だと考えられており、空海が 1,200 年以上前に焚いた聖なる火はそれ以来、この山で燃え続けていると言われています。高野山の開創など、空海はその生涯を通じて他にも多くの偉業を成し遂げ続けました。現在の和歌山県にある高野山は広大な寺院群を有している場所で、真言宗にとって特に重要な聖地の一つです。空海はその功績によって、死後には「偉大な仏教指導者」を意味する「弘法大師」という称号を贈られました。大師堂の「大師」とはこの称号を縮めたもので、つまり「弘法大師のお堂」という意味です。この建造物の起源は江戸時代 (1603-1868 年) まで遡り、この土地内にあるほとんどの寺院を焼損させた 1887 年の火災において焼失を免れた数少ない建造物のうちの一つです。お堂内には質素な空海の銅像が祀られています。